

人文学の研究はどのように すれば「見える」のか ： 人間文化研究機構の取り組みを通じて

著者	後藤 真
雑誌名	人文社会系分野における研究評価 : シーズからニ ーズへ : 研究大学強化促進事業シンポジウム報告 書
ページ	29-43
発行年	2019-03
URL	http://hdl.handle.net/2241/00155095



人文学の研究はどのようにすれば「見える」のか：

人間文化研究機構の取り組みを通じて

後藤 真

人間文化研究機構 国立歴史民俗博物館研究部・准教授

今日の話題

皆さま、こんにちは。人間文化研究機構の後藤真と申します。よろしくお願い申し上げます。私のほうからは、先ほどの池田先生のTSUKUBA indexを受けて、人間文化研究機構でいくつか行っていることを中心にお話しします。

まずは、今日の流れについて説明します。人文学ではどのような研究を重要視しているのかを簡単にお話しした上で、これまでの人間文化研究機構の、いくつかの取り組みを通じて、どのようなことを考えてきたかについてお話をします。最後に、これは厳密に機構の中でオーソライズされているわけではありませんが、人文学の研究を行っている立場の者として評価のあるべき姿についてお話をしたいと考えています。

私は、もともとは日本古代史を専門とした研究者です。現在は、そこから専門を少し変えまして、特に歴史資料のデジタル化。いわゆるデジタル・ヒューマニティーズを専門に研究をしています。そのようなこともありまして、歴史だけではなく人文学の成果や資料のデジタル化に関連することを少しさせてもらっている文脈の中での話となります。

人間文化研究機構とはどのような組織かについて簡単にお話をします。人間文化研究機構は、全部で六つの研究所によって構成されています。現在、私が所属していますのは、日本の歴史を研究する博物館機能を持った研究所である国立歴史民俗博物館です。千葉県の佐倉市にあります。日本文学を研究する研究所の国文学研究資料館です。東京の立川にあります。同じく立川にあります

日本語学を中心に研究をする国立国語研究所といわれる組織があります。そして、主に日本文化を国際的に研究する拠点である国際日本文化研究センターといわれる組織があります。これは京都です。同じく京都にあって、人文学も含めた形で地球環境を研究する総合地球環境学研究所といわれる研究所があります。また、大阪の万博公園の所に主に文化人類学を研究する国立民族学博物館といわれる組織があります。この六つの研究所が一つの法人になっているものが、人間文化研究機構です。われわれは日本史学、日本文学、日本語学、日本文学研究、人文も含んだ環境学を行う研究、文化人類学などを行っている、研究所の集団であることをまずは話の前提にしたいと思います。

また、現在、人間文化研究機構では、全部で大きく五つの研究プロジェクトを展開し、機関を超えた形での共同研究を実施しています。時間がないので、これは人間文化研究機構のウェブサイトなどで詳しくはご確認ください。それぞれが歴史文化の資料保全や博物館の活用、各機関のミッションに即した形での、人文学の研究を進めています。

次にお話をするのは、これは、ごく簡単な人文学の、研究の流れです。これも人文学の研究者にとっては当たり前の話でいまでもありますが、われわれが行っている人文学の研究は、自然科学等と何ら異なることがあるわけではありません。きちんと先行研究を集めて、資料を集めて、そのデータに基づいてノートを作って、論文と資料集を作ります。この研究のプロセス自体は、他の学問と全く変わることがないことも前提として触れておきます。

特に人文学が重視する研究として、まさに先ほどのTSUKUBA indexなどがそうですが、何をいっても、まずは多様性です。また、非常に細かく研究成果を作っていくことが特徴です。

人文学が重視する研究

例えば、ある研究者は江戸時代における千葉県のとある小さな村の支配や、財政等に関わるような研究を行っています。非常に細かな研究に見えますが、それ自体に意味がないわけではなく、これは江戸時代がどのような社会であったかを見るための一つの重要な材料です。それを積み上げなければ、江戸時代

がどのような社会であったかがわからないために、このような研究が必要なのです。

このような小さな研究の広がり、人文学としての新規性をくり上げていっているといえます。また、これは学会等の広がりにおいても特徴的です。人間文化研究機構の研究教育職員は264名います。IRの調査で調べると、関連学会数が約600の学会に264名で参加をしていることが分かります。ちなみに自然科学研究機構は約2倍の研究者がいますが、関連学会数は半分以下になるようです。

このような形で、研究者がどれぐらいの数の学会に関わっているのか。その点においても、人文学の研究者が1人でどれだけ複数の学会に分散して、関わっているかも分かるのではないのでしょうか。それ自体は、われわれ人文学にとっては良いことだと理解はしていますが、結果的に分散して見えにくくなっている問題点がセットになります。この分散した結果として、例えば引用の速度が理系等に比べると遅くなります。

人文学が重視するアウトプット

分野ごとの学術論文の本数が減るので、相対的に引用される時間が過去によりさかのぼる問題があります。特定の分野に限っては、論文の生産サイクルの問題にもなってきます。また、人文学が重視するアウトプットとしましては、著書や単著の重要性が挙げられます。海外での、人文科学の評価の分析等を見ても、常にこの”book”が問題になってきます。これは、いわば多様性の裏返しともいえます。

複数の小さな成果を重ねて、大きな理論へと転換して、分量がそろったときに一つの著書ができます。その価値が非常に高いことが、人文科学の特徴になります。社会的な展開としても、人文科学はあくまでも人のことを研究するわけです。人の動きを研究した結果が、研究者以外にも直接的に還元されるほうがより望ましいという観点からも、なるべく書籍を出すことを重要視しています。結果的に言語も自国語の研究になりがちな点も特徴です。

私は、このような評価のお話を何度かさせてもらっています。人間文化研

究機構での、書籍内の論文数およびBook Chapterと、学会等の論文数の比率を数えました。これは平成29年度のざっくりとした数字です。国立歴史民俗博物館の場合は、論文の1.25倍ほどBook Chapterのほうが、量が多いと数えます。国文学研究資料館では、本のほうが2倍ほど分量的に多いです。とにかく論文よりは書籍のほうに圧倒的に重点を置いて、研究成果を出している様子がここでもよく分かります。

論文の量的評価

このような例は、自然科学研究機構の小泉周先生とともに特別研究促進費の『研究力を測る指標』として、いくつか検討をしました。これは2018年3月に報告書を作成しています。基礎データについても既に公開済みになっています。ここでも同じく人文社会系に限っては、著書の位置付けや言語の問題、引用の問題等の指摘をしました。また、総じて根本的な、データの量の不足についても強く指摘をしました。いろいろなことを考えようとしても、まずは分析するためのデータがないのではないかと強く指摘をしました。

この研究につきましては、Elsevierとも協力して進めたものです。例えば、Scopusのデータを科学研究費補助金の分類にして、Book Chapterを見ていきますと、このような数字になりました。Book Chapterを10位ぐらいまで並べたものです。このような形で数字がずっと出てきます。こちらと科学研究費補助金の取得件数の順位が大体、近い数字になるような傾向が一般的にはあるようです。もちろん例外はあります。書籍内論文と雑誌論文のバランスをどのようにうまく取って見ていくかは、重要であると指摘をしました。

人文系で書籍の量的位置

その一方で、同条件で生物化学を見ていきますと書籍は508、雑誌は2万6651となってしまいます。このようになると量的な処理で、ほとんど書籍を計算する必要はない状況が生じてしまうのは事実です。この辺りも人文と自然科学で大きく違いがあります。これは個人名が出ているので、お手元の資料には入っていません。被引用者を見ることには、意味があるか。これは論文ではな

くて人で見た場合ですが、人間文化研究機構のほうで集計をしました。

日本国内のクオリティーペーパーといわれる非常に水準が高い学術雑誌と、一般的にいわれているものの被引用者を並べたものです。左側は、京都に本拠がある学会の学会誌のベスト10です。右側は、東京に本拠がある歴史学の学会の引用された人物のベスト10になっています。これを見るとおおむね、歴史学者と日本史学者の超大物がずらりと並ぶことは間違いありません。引用されている量で見えていくと、そのような人で見てもある程度の傾向は読み取れることでしょう。

ただし、この著者のうち被引用者の雑誌論文は、全体の引かれている文献のうち10分の1はありません。みんながほとんど書籍を引用していることが分かります。これも既に何度かお見せした図です。論文がどれだけ過去の論文を引用しているか。そちらについても人間文化研究機構のほうでは調査をしました。

論文の被引用期間の長さ

例えば、過去2年前までの論文は、全体の引用した論文の5パーセントぐらいであると数えます。このグラフは立ち上がりが早ければ早いほど、最近のものを多数引用しています。立ち上がりが遅いほど昔のものまで引用していると見ていきます。そのように見ていきますと情報学などは、立ち上がりが早いことが分かります。その一方で、民俗学はずっと遅いです。このように引用の速度からも研究の傾向を見ることができます。

そのように考えていきますと、量的な計測は人文社会科学の研究力を反映していないのかといいますと、必ずしもそうではなく、一般的には反映しているのだろーと考えています。ただし、著書をどのように考えるかは、非常に大きな問題です。それ以外にも分野や言語圏の大きさが、自然科学とは異なることも重要なポイントになります。また、引用の観点でいきますと、資料集やデータの公開も課題になります。

また、引用の年数も課題です。過去5年以内、などしてしまうと、全く測れていないことがよく分かります。引用の年数をどのように考えるかは、全体として考慮する必要があります。結果的に書籍であれば国際化の指標は国際共

著論文ではなくて、国際共著書籍のような考え方が可能なのではないのでしょうか。このように書籍の重要性も考慮する必要があるといえるでしょう。

人間文化研究機構のとりくみ

次に人間文化研究機構の取り組みとしましては、論文の質的評価として人文系サイエンスマップの試みがあります。これは、厳密には引用の関係を図にした自然科学というサイエンスマップとは異なります。

これは単純に量的な処理だけでは比較ができない、多様性を表現するための質的な検討を行うためのものです。論文リポジトリの中からキーワードを抽出し、一定の傾向を見ることによって研究の傾向を導き出そうとするものです。

このスライドはお手元のポンチ絵を全て細かくばらばらにしたものです。例えば、これは人間文化研究機構の中で、鹿児島の方言に関係する研究です。単純にキーワードで引っ掛けているだけではなく、類似した言葉を併せて対象としています。鹿児島の方言の研究がいつ、どのぐらい行われているか。その論文同士の近さは、どのぐらいかなどを可視化したものになっています。

これは国立国語研究所が、2000年代の後半から関連性の非常に強い研究を集中的に出していることを示しています。国立民族学博物館は中心的ではなく、関連は薄いですが、地域の言語研究をコンスタントに行っています。国際日本文化研究センターでは、最近は行われていないですが、ある時期に集中的に行われている。そのような研究の傾向がここでは分かるわけです。これは機関と年代で比較したものです。

そして分野別。これは横軸が研究、縦軸が機関です。国立国語研究所は、言語学を集中的に行っていることが分かりますが、国際日本文化研究センターは非常に広く薄く研究を行っている傾向が見て取れます。

東アジアというキーワードでマップを作った結果の、国立歴史民俗博物館、国際日本文化研究センター、国立民族学博物館の三つの機関です。例えば分野別でいきますと、それぞれの傾向が分かります。国立歴史民俗博物館は歴史が中心で、国立民族学博物館は分野横断でしているなどの傾向を読み取ることを行っています。

課題と論点

ただし、まだ課題はあります。現在では人間文化研究機構の中だけで行っていますので、今後はいくつかの大学とも同じような比較検討ができないかと進めています。いくつかの大学とは、既に話を進めています。このしくみはリポジトリを対象とすれば比較的容易にできることが特徴です。ただし、書籍等は電子化されていないので非常に難しいです。これと併せて地域的な特性や文理融合、地域へのインパクトについても考える必要があります。

そして、今後への重要な課題です。これも常に言っていることですが、成果の電子化です。根本的にデータが不足しています。現在は、人間文化研究機構でも多数の引用の情報を収集していますが、まだ足りていません。書籍も含めた論文データベースの整備は、極めて重要だと主張しておきます。これは単に自分が行ったことの自己申告だけではなく、外的に分析をする観点からも重要です。

もう一つは、引用されているものの対象がどのようなものかをもう少し考えていく必要があります。それは引用の文化によって、人文社会学が重要としている価値のある仕事は何かを引用が示しているからです。同じように分野の大きさの問題もあります。もちろんアウトプット以外の質をどのように見るかも、今後の課題としてはあります。

そして、評価を含む可視化は、あくまでも道具です。このデータをもとに、われわれがどのように戦略を立てるかを含めた上での評価を考える必要があります。これは私見になります。その上で、自然科学と同一のクライテリアが必要か。もしくは、機関間で測れるものは本当に必要なのか。短期的に、中期的、長期的にどうか。そのようなものを全て含めて、考える必要があります。これは先ほどの池田先生とは少しずれる論点になりますが、引用の作法のようなものを捉え直すことも重要と考えています。引用の情報は、さまざまな研究の作法を含んでいます。

いつのものなのか。何を引くのか。誰を引くのか。それを可視化することによって、見えてくるものが変わるかもしれません。今はまだ見えていないので、どのようなになっているかは分からないわけです。研究に関わる社会的インパク

トですが、人文機構には本を50万部以上売り上げている研究者がいます。ただし、それは学術書籍ではないので、研究力としては評価されないわけです。

評価は、本来はある目標に対してどこまで、何を達成できているか。つまり自らのアセスメントであって、現在は達成できていなくてもいいからここまでは到達したということをみるのが、あるべき姿ではないかと考えています。評価の数字での総体的な少なさをいかにネガティブに捉えないかも大事なのではないかと最後に述べて、終わりにします。申し訳ありません。時間を超過しましたが、これで私のほうからは終わりになります。ありがとうございました。

大学共同利用機関法人
人間文化研究機構

人文学の研究はどのようにすれば 「見える」のか：人間文化研究機構 の取り組みを通じて

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国立歴史民俗博物館
後藤真

今日の話題

2

- 人文学はどのような研究を重要視しているのか？
- これまでのいくつかの取り組みを通じて
 - 人文学の「量」は何を見るべきか
 - 人文学の「質」は何を目指すべきか
- 評価のあるべき姿とは（私見）

人文学が重視する研究

3

- 多様性
 - ex)江戸時代における千葉県の* *村の財政に関する研究
 - 広がりが新たな新規性を生む
 - 学会等の広がりにおいても
 - 人文機構の研究教育職員264名で関連学会数が606
 - 結果的に分散し、見えにくくなっている
- 結果的に
 - 引用の速度の問題 特定の部分に限っては論文の生産サイクルの問題にも

大塚市立図書館蔵書
人間文化研究機



人文学が重視するアウトプット

4

- 著書（特に単著）の重要性
 - 多様性の裏返しともいえる
 - 小さな成果を複数重ね、それを大きな理論へと転換する（分量が必要）
 - 社会的な展開を重要視
 - 「人」の動きを研究した結果はその対象となった「人（≠特定個人）」に向けてより直接的に還元されるほうが望ましい
 - 結果的には言語も自国語になりがち
 - 人文機構の書籍内論文数と学会等論文数の比率（論文／書籍） 歴博：1.25 国文：2.08 国語：0.70 日文：1.70 地球：0.49 民博：1.14 （概数）

大塚市立図書館蔵書
人間文化研究機



5

論文の量的評価

- ・ 特別促進研究「研究力を測る指標」（代表・小泉周）にて
 - 2018年3月に報告書を作成
 - 基礎データとともに公開済み
- ・ 人文社会系に限っては
 - 著書の位置付け 言語の問題 引用の問題などを指摘
 - 総じて根本となるデータ量の不足などを指摘

大塚市立図書館
人間文化研究機



6

人文系で書籍の量的位置

- ・ 書籍の中の論文数を雑誌の論文数とあわせて見る

	書籍内論文数	雑誌論文数	科研費取得 件数順位
東京大学	239	326	1
早稲田大学	151	90	2
京都大学	119	168	3
筑波大学	82	93	15
大阪大学	56	67	4
広島大学	55	35	14
九州大学	54	74	5
慶應義塾大学	51	85	-
神戸大学	48	56	11
北海道大学	46	68	7

Scopusのデータを科研費分類に
再分類した後の史学

	書籍	雑誌	科研費件数順位
東京大学	508	26,651	1
京都大学	465	19,413	3
大阪大学	374	17,088	2
東北大学	306	14,813	5
名古屋大学	233	10,146	4
北海道大学	220	10,444	7
九州大学	207	10,644	6
筑波大学	151	6,957	10
慶應義塾大学	148	6,731	15
千葉大学	137	5,073	20

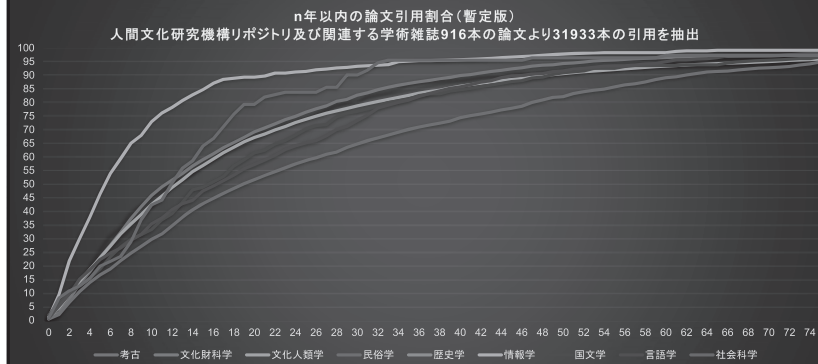
参考：同条件の生物科学

大塚市立図書館
人間文化研究機



論文の被引用期間の長さ

- (リポジトリでの) 情報系の論文にて引用する論文は50%が5年以内のもの
 - 歴史学・文化人類学・言語学等の論文で5年以内の論文は全体の25%程度
 - 国文学では全体の約25%、民俗学にいたって約35%についてが30年以上前の論文の引用である
- 引用の分析の期間をより長く取る必要性



量的計測は人文社会科学の研究力を反映していないか？

• 反映している

ただし：

- 著書をどう考えるか？
 - 分野や言語圏の大きさをどう考えるか？
 - 資料集やデータの公開などをどう見るか？
 - 引用の年数をどう考えるか
- は全体として考慮する必要がある

→「国際共著書籍」などは国際化の指標としては重要である可能性が

→翻訳されたものの広がり→例えば日本における韓国研究が日本語で論文になり、英語で論文になり、韓国で本になると、日本の人社系の研究プレゼンスは大きいと言えるデータの把握

人文機構のとりくみ

9

論文の質的評価としての「サイエンスマップ」

- 単純に量的処理だけでは比較ができない多様性を表現するために
- 論文の中からキーワードを抽出し、一定の傾向をみる→研究の傾向を導き出す
 - －（機構のリポジトリからOAI-PMHでハーベスティング＋クローリング→論文データからキーワードを抽出）
 - － クラスタリングを行い可視化する

大東亜国際研究開発法人
人間文化研究機構



ねらい

- 人文系研究成果を可視化すること
- 特に量ではなく、その質と多様性に注目
- これまでと異なる「研究世界」の創出

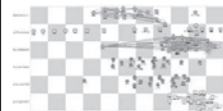
手法

- 人文機構のリポジトリにある論文（約15000本）をクローリングレスキャン
- テキストデータをもとに類似の用語をクラスタリング
- クラスタリングしたものを平面上におとしこむ

※ある検索キーワードを入れ、そのマップを表示

検索キーワード

例1：鹿児島・方言で検索



機関別クラスタリング表示（横軸：年代 縦軸：機関）

- 国語研（上から3つ目）は2000年代後半から関連性の強い研究を集中的に出している
- 民博（上から4つ目）は中心的ではない地域の言語研究がコンスタントに行われる
- 日文研は2000年前後に多く研究があるが、近年はあまり対象としていない



分野別表示（縦軸：研究分野 横軸：機関）

- 国語研（赤）は言語学に集中した研究である一方で日文研（ピンク）の分野は広い。
- 民博・歴博（青）は言語と歴史の両分野にまたがる

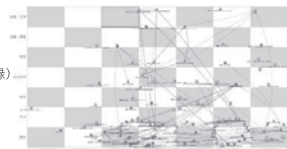
例2：東アジアで検索

論文1件ごと分割表示

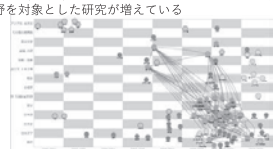
（3機関のみ・縦軸：分野

横軸：年代）

- 歴博は歴史中心（濃い青）
- 日文研も歴史が多い（青緑）
- 民博は分野横断型（赤）



詳細分野別表示（6機関） 機構全体では2000年代後半から、より広い分野を対象とした研究が増えている



課題

11

- 今後はいくつかの大学と議論できる場を考えた
い
- 質的データの比較がある程度容易なサイエンス
マップ
- ただし、書籍が難しい！
- 研究者情報によるものはまだない
- 地域的特性・文理融合型・地域へのインパクト
など



論点

12

- この結果から何を見なければならぬか→評価
を含む可視化はあくまでも「道具」
 - このデータをもとにした「戦略」につなげてこそ意
味がある
 - この前提の上で
- 自然科学と同一のクライテリアの評価軸は必要
か
- 機関間で測れるものが必要か
- 短期的に中期的に長期的に



今後への重要な課題

13

- 成果の電子化→根本的にデータが不足している
 - 書籍も含めた論文データベース整備の重要性→自己申告ではなく、外的に分析可能にするためにも
 - 学会などでやれることもあるのではないかと 国際性
- 引用されているものの対象は何か？
 - 人社が重要としている価値のある仕事とは何か？
 - ・ 例えば「引用」としてひいている「資料」をどのように評価するか
 - 分野の「大きさ」の問題→重要
- Output以外の「質」をどう見るかも今後の課題
- ただし、人社でも計量による研究の強みは見える→データがないだけ

大塚市立図書館法人
人間文化研究機



評価のあるべき姿として

14

- 本来はある目標に対して「何を達成できているか」という自らのアセスメントとして
- 現在、達成できてなくても良い→「何ができていないか」を考えるための道具であるべきではないか
- 評価の単純な未達成をネガティブに捉えないような考え方が必要ではないか（ライデン声明とともに）

大塚市立図書館法人
人間文化研究機

